

学位論文の要旨

論文題目 (和文) 中国残留日本人孤児帰国者家族の研究
—広島県在住者の事例を通じて—
(英文) The Study of the Family of Japanese Orphans from China
: Through the Cases of Residents in Hiroshima

広島大学大学院総合科学研究科

総合科学専攻

学生番号 D191989

氏名 任 惠中

論文の要旨

研究背景と目的

第二次世界大戦の終結から、すでに 75 年以上が経った。日本で戦争の記憶の風化が進む中、戦争を体験していない世代が社会の大半を占めるまでになった。「過去の過ちを 2 度と忘れない」、「戦争を知らない世代に語り継いでいくことが大切だ」ということについて、中国残留日本人孤児（残留孤児）とその家族たちは、一般の日本人より痛切に感じるかもしれない。それは、こうした歴史に翻弄された多くの残留孤児が、長い間日本政府による十分な補償を受けることなく、放置されている状況にあったからである。こうした状況を踏まえ、日中の両方にルーツを持つ彼らが、これまでにどのような生活を営んできたのか、また、どういった苦難に直面し、いかに乗り越えていったのかについて、具体的な事例と照らし合わせて分析する必要がある。

従来、日本側の研究は、残留孤児が家族と帰国してからの生活に焦点をあて、どのように日本社会に融合し、どのような問題に直面しているかなどを分析する、社会学的研究が多かった。特に中国帰国者 2 世、3 世を研究対象として、帰国後の生活実態の解明に焦点を当て、日本国内の社会問題として分析する研究がそうである。日本での研究は、中国帰国者の社会生活上の現実問題の解決への提言を目的に、彼らの問題を日本国内の社会的な問題として位置づけ、日本政府の対応の不備・不作為を批判してきた。中国人養父母に対する支援も、今なお十分ではないと評価されている。しかしこの問題は、養父母と残留孤児の高齢化や帰国者の日本社会への統合に伴い、日本社会から徐々に忘れられつつあるのが現状である。

つまり、中国帰国者が持つ歴史的経緯を踏まえた上で、歴史学・社会学的観点から、彼らの生活実態を分析することが、日本の先行研究では欠けている点だと思われる。日中間での戦後の国際関係や経済的関係の変化の中に残留孤児・中国帰国者を位置づけ、彼らが帰国後に国内外に構築した繋がりを、世代ごとに分けて検討する歴史学的研究は

ない。特に、米中対立の激化という昨今の世界情勢の中で、米国との強い同盟関係を持つ日本にとっては、これからの中国との関係は、さらに悪化するリスクが非常に高い。政治的な衝突が回避できない可能性があるなかでも、民間交流を通じて、日中友好関係を維持するのは可能であるし、今後共両国にとって重大な課題である。本論文では、この点に関して、中国帰国者がこれまで築いた特別な立場を活かして、日中の相互理解促進のために果たしうる可能性を考察していく。つまり、彼らの肯定的側面を検討する。

戦争に苦しみ、満州開拓団などの経験をもつ残留孤児は、日中の社会からほぼ消え去りつつある。こうした過去の出来事をいかに次の世代に継承し、いかに戦争の犠牲者を想起・追悼するかは、過去の誤りをもう2度と繰り返さないようにするためにも非常に重要な課題である。日本と中国の間には、日中戦争に対する戦争責任や歴史認識をめぐるズレが残っている。残留孤児や中国帰国者という言葉は、それなりに知られているにもかかわらず、日中戦争に関する戦争責任の認識や追及、補償問題および再発防止のための歴史教育などの「戦後処理」という観点から、残留孤児の問題を考察した研究は、現状でも手薄である。残留孤児・中国帰国者の問題を正しく認識するためには、残留孤児発生 of 歴史的経緯と戦後の日中間の歴史認識のズレを論ずることがまず不可欠である。本論文では、中国帰国者を戦後の日中関係史の中に位置づけ、帰国後の彼ら4世代の生活実態を解明することで、今まで重視されてこなかった彼らの繋がりが日中相互理解促進に持つ可能性を論じていく。つまり、歴史学と社会学の分析手法を合わせることで、中国帰国者という存在を総合的に考察する。彼らが置かれてきた生活実態を解明し、彼らが日中両国での歴史認識のズレを埋めていくために、いかなるプラスの影響を及ぼしうるのかを考察する。ここに、本研究上の新奇性・創造性と意義がある。

論文の構成

本研究の研究方法としては、広島県に在住する帰国者（1世）とその2～4世71名をインタビュー対象として聞き取り調査を行い、それを分析する手法を取った。インタビューの記録や録音、アンケートの回答内容から帰国者のプロフィールを作成し、彼らの生活史を文字化し、ライフヒストリーの研究方法で、帰国者本人や家族と中国の家族・親族との、また周囲の日本人との繋がりに焦点を当てて分析を行った。

第1章では、中国帰国者の歴史的背景とその経緯を取り上げる。ドイツの「過去の克服」、特に現在のドイツにおいて盛んになっている、加害者も被害者の立場に立ちうる可能性を体現した「躓きの石」設置活動という民間活動を紹介し、それとの対照を念頭に、中国帰国者の歴史的背景と特性のほか、揺れ動く日中間の国際情勢における彼らの存在の重要性について検討した。その結果を踏まえ、歴史学・社会学的観点から見た中国帰国者が、日中友好関係促進で果たしうる可能性を推論・設定した。

第2章では、筆者がインタビューした広島県の中国帰国者1世12名について取り扱った。彼らは、中国の言語・文化で育てられ、「中国人アイデンティティ」を持って日

本へ帰国した。その結果、彼らは日本人として迎え入れられず、日本社会の差別や排除から逃れるため、日本文化に溶け込む努力が必要となった。日本社会で生活するために1世たちは、生活面で多様な繋がりを日本国内で構築し、生活レベルで両国の伝統や習慣の交流を促進した。今回の調査では、中国帰国者1世が、生活面での活動や日本人の友人との付き合いを通じて、中国帰国者の歴史を周囲の日本社会に示し、歴史の継承と教育を促した事例を確認した。加えて彼らが、中国のルーツが生み出す結びつきや中国文化を周囲の日本社会に持ち込むことによって、多文化社会の構築、異文化理解の促進という面に寄与した事例も確認した。

第3章では、筆者がインタビューした広島県の中国帰国者2世21名について取り扱った。彼らの中には、自ら積極的に日本の社会と関わり、仕事の関係や経済面での繋がりを構築し、日中間の貿易や経済の往来を促進することに貢献した人々がいた。帰国者1世の日本社会への経済的統合が不十分な状況と比べて、20代で帰国した帰国者2世は、その若さから日本語や日本社会のルールを迅速に習得し、日本での生活に慣れていった。生活面で1世が作り出した繋がりのもと、多くの帰国者2世は、経済的な自立を実現するよう努力した。帰国者1世と同様に中国の文化と教育で育った2世は、日本語の日常会話には1世以上に問題がないが、文化面においては、日本の文化や思考方法を深く理解できず、日中両国の文化を全般的に受容することが困難だった。その事が、次世代への家庭教育において、一方で日本化の促進と、逆に中国文化の保持強化という対立方向のベクトルを生んでいった。また時代の変化で、このベクトルでの重点も変わったことが確認できた。

第4章では、筆者がインタビューやアンケート調査した広島県の中国帰国者3、4世38名について取り扱った。彼らは、2世が築いた生活基盤の下で日本語と日本文化を完全に習得し、日本社会の底辺ではなく、主流社会に入っていくことが可能となっていた。本章では、特に3、4世のアイデンティティの認識を中心に、中国文化との関係性を考察し、ハイブリッドなアイデンティティを持つ者8名以外に、日本人アイデンティティを自認する者28名の中にも、中国に対する興味・関心を目覚めさせ、自身のルーツを新たに開拓する存在があることを確認した。彼らも、家庭教育を通じで中国の文化遺産を無意識に継承しているのであり、日本人として日本社会に適応する過程で中国との繋がりを日本社会に持ち込み、多文化社会の構築を促進する可能性を有していることがわかった。

中国帰国者は、日本の国籍を持ち、日本国民という立場である一方で、中国からの文化的影響も深く受け、両国に多くの繋がりを持っている。その多角的な立場は、国籍やナショナリズムの境界を超えて、俯瞰的に過去の歴史を継承する可能性を彼らに与える。中国人養父母や残留孤児・中国帰国者への顕彰は、日中両国民にも肯定的に受容できることであり、日中戦争で命を落とした両国の犠牲者への追悼へと拡大していく可能性を生み、戦争の悲惨さに警鐘を鳴らすことにつながる。このように、中国帰国者は、日中

間で過去に向けられた共通の歴史認識と想起の文化を構築する可能性を提供できる存在なのである。ドイツの「民間レベル」の和解や相互理解は、犠牲者の氏名と運命を短く刻んだ「躓きの石」を犠牲者の住居前の舗道に設置する市民運動によって、ドイツ人の側にもその「加害者」性だけでなく「被害者」性を意識させることで広がった。殺害されたドイツ・ユダヤ人は、日常で自分たちの周りにいたユダヤ系・ドイツ人だったのである。これと同じく、中国帰国者の存在は、自己の「加害者」性と別の面での「被害者」性の認識を日本人に呼び起こす可能性があり、実際にそのような事例が、今回のインタビュー調査からも確認できた。ドイツで実現した「過去の克服」を、日中間で実現するためのキーパーソンが彼らなのであり、これが、本研究の結論である。